

【 特別企画：寄稿論文 】

大学の授業と教師の身体性

—オンライン授業における授業者の非言語情報の必要性の再考—

谷口直隆

(広島修道大学)

1. はじめに

COVID-19 感染拡大の影響により、2020 年度は多くの高等教育場面でオンライン授業が行われていた。オンライン授業は、LMS 等を利用してアップロードされた動画や文書ファイルに学生がアクセスして学習する非同期型（オンデマンド型）や Zoom や Google Meet 等のオンライン会議システムを利用して行う同期型（同時双方向型）等で実施され、オンライン会議システムを利用した授業では、「ブレイクアウトルーム（Zoom）」や「ブレイクアウトセッション（Google Meet）」などの機能を使ったグループワークなども行われている。

このとき多くの教員が、従前の授業と同様の授業を、対面ではなく、非対面、オンラインでどのように提供することができるか試行錯誤していた。いかに質を落とすことなく、いかに対面授業と同様のものが提供できるかに腐心したことだろう。その際、オンライン会議システムは、対面授業と同様、授業担当者が顔を見せながら話したり、資料を示したりする同期的な授業の実施を可能にするものであった。つまり、対面授業の中で行われるコミュニケーション（言語及び非言語コミュニケーション）を再現、あるいは、代用する方法として活用されたと言える。このツールを利用して、授業担当者は、授業におけるコミュニケーションを対面時のものに「近づけよう」としていたように思われる。そこでは、対面授業と異なるコミュニケーション上の特徴は、「オンラインコミュニケーションの難しさ」（例えば、発話の重なりやターンの交替など）としてネガティブに捉えられた。

しかし、授業において、教師・授業者のコミュニケーション行為は果たして学習者の学びを常に支援するものとして存在し得ているのだろうか。ときには、教師・授業担当者のコミュニケーション行為が学習を阻害し、抑制する形で働いていることもあるのではないか。逆に言えば、教師の非言語情報の「不完全さ」をポジティブにとらえる視点も必要なのではないだろうか。

本稿では、オンライン会議システムを利用した少人数での授業における授業担当者の非言語的側面に着目し、教師・授業担当者の「身体性」について、その必要性やあり方について考察することを目的とする。

2. 大学生の学びの実態

岩垣（2003）は、「今日の授業のかかえている深刻な問題」として「子どもの正解信仰」「子どもの「生徒化」」「学力の非日常性」の3点を挙げ、「今日求められる授業実践」として「共同探求型の授業」「共同探求者としての教師と子ども」「学習と社会参加の統一的な展開」という視点を示している。岩垣の指摘するこの問題については、近年の大学の授業についても同様のことが指摘できる。つまり、「正解や真理は、いつも教師の背後にあって、教師が必ずもっているものであり、そのため子どもは、授業の中でそれを言い当て学びとればいいのだと考えるようになり（中略—引用者）教師と共に探求し、つかみ取っていくものだと考えていない」（p.41）、「ただ学ぶだけの受け身の存在」（p.41）になっている学生の存在である。

そもそも大学の授業は、講義と演習との組み合わせによって、岩垣の示すような学びを実現していたはずである。大学の授業形式の一つである「ゼミナール形式（ゼミ）」に代表されるように、授業者と学習者の関係は「縦」の関係だけではなく、「横」の関係でもあり、授業者も含めた成員の相互作用によって知識が生成される社会構成主義的な学習が行われていた。しかし、現在の大学生は、主として自身の研究のための学習が行われるゼミナール形式の授業でさえも、「正解は教師（指導教員）が持っていて、いつか教示されるもの」と捉えているように思われる。さらに、「なぜ個別であるはずの研究について、他の学生と同じ授業の場で指導がなされるのか」「指導教員からの個別指導で済むのではないか」のような疑問も見受けられる。これに対して、大学の教員は、そもそも学びをどのように考えればよいのか、学習者である大学生の学習観に対してアンラウンを促すことから授業を始める必要に迫られている。授業について岩垣（1999）は、芝田進午（芝田，1961）の言を援用しながら、「認識過程と集団過程」という視点で次のように述べている。

学級の中に、内的条件の異なる子どもたちがひろく存在するとき、かれらは、集団志向を通して自己の認識をひろげ、深めることができる。

他方、認識をひろげ、深めることは、集団がひろがり、民主化していくことでもある。なぜなら、認識の過程で推論と検証が厳しく求めれば求められるほど、そこでの集団の人間関係はますます民主化を要求するからである。まさに認識の拡大・深化の過程は、集団の民主化の過程と密接に関連する。（p.32）

岩垣が述べるように、授業では、ディスカッションや話し合いなどを通して、学習者が自身の認識をひろげ、深めることができる。そして、そこでは教師・授業者は、「正解」をもつ存在ではなく、共に課題や真理を探求していく「共同探求者」、つまり、学習者の一人として存在すべきであるし、存在することができる。つまり、教師・授業者も含めた認識の拡大・深化及び民主化の過程こそが授業（特に大学の授業）のあるべき姿と言えるのである。先に指摘したような問題をかかえる現在の大学の授業では、授業における教師・授業者の在り方も含めて、学びや授業について、「まなびほぐす」ことから授業を始めることが必要である。

3. 大学における授業と授業者の非言語

先に、大学生の学習実態として、岩垣の言を用いて「正解信仰」を指摘したが、大学生を含む学習者はその「正解」や自分の意見の「正誤」の判断をどのように行うのであろうか。もちろん、

授業者の言葉による直接的な正誤の判断や正解の提示によってもその判断が行われるだろうが、本稿では教師及び授業者の非言語行為、非言語的な要素に注目したい。

伊藤・関根(2011)は、小学校の授業場面における教師と児童の視線行動を分析し、教師の視線配布行動が「児童の判断や発言に対する評価を知るための、児童にとってのリソースとして機能する場合がある」(p.151)ことを指摘している。また、教師・授業者の側に立ってみれば、コミュニケーションにおける非言語的要素が、学習者に対してフィードバックを与える、そして、評価する際の重要な指導技術であることは、実践者の間でも共有されていることであろう。例えば、菊池省三(菊池,2022)は『授業力&学級経営力』の連載「教師のほめる技術」の中で「非言語の身体動作でほめる」すなわち、「身体動作の『ほめ言葉』を意識する」ことを教師の技術として示している。ここでは、その身体動作として、「顔の表情」「視線」「指・手・腕の動き、腕組み」「姿勢」「首のうなずき、かしげ方」「身体全体の移動時間」「足の動き、開き方」の7つの視点を示し、その活用を提案している。つまり、教師の学びにおいて、自身の非言語行為、非言語的側面に自覚的・意識的であることが求められており、教員養成課程における模擬授業や実習でも一つの教授ストラテジー(指導技術)としてその習得と活用を目指した指導が行われていることは想像に難くない。

このように、教師は非言語を意識的に活用して学習者を評価したり、授業の雰囲気²⁾を操作したりして、教育活動をマネジメントし、その一方で学習者は、自身の意見や考えの正誤、その学習活動における「正解」について、教師の非言語的側面もその判断の大きな材料として活用する、そのような学習主体として育成、強化されていくという構造が指摘できるのである。

ここで再度、大学の授業、特にゼミナール形式の授業における学習者の姿を例に、その実態について述べたい。ゼミナール形式の授業は多くの場合、授業担当者が既存の体系知識を示すのではなく、学生がある問題やトピックについて発表し、それに対して参加者が質疑応答やディスカッションを行うという方法で行われるだろう。しかし、先に岩垣が問題として指摘した「正解信仰」や「生徒化」の蔓延る集団では、その実現が難しい。すなわち、学習者である学生は、発表担当者に対して、質問したり、異を唱えたりすることなく、授業担当者が話し出すことや、話や議論を引き取ることを待ち、その授業担当者の発言を「正解」として享受していく。「正解」を志向し、「不正解」や「誤り」を避けるために議論に参加せず、そこで行われるべき、適切性や妥当性の検証にも参加することがない。あるいは、質問や意見を述べたとしても、それが的を射たものであるかを授業担当者の様子をモニタリングしながらその評価を確認している。

そこでは、その議論の内容や結果、学生の持つ問題意識さえ授業担当者の考え、価値観の枠を出ることができず、岩垣の言う認識の拡大や深化、集団の民主化は実現されない。学生が「正解」を志向し、発言しないという態度をとることは認識の拡大や深化、集団の民主化を放棄した姿勢であり、そこでは、授業担当者は「正解」を持つもの、それを示すものとして存在することを求められ、同じ一人の学習者として存在することは許されない。

ここまで岩垣の言を借りながら述べてきた学習者の実態については、現在の教育界で「主体的・対話的で深い学び」が標榜されていることも、現在の授業及び学習者の実態の裏返しとして、その証左ということができよう。現在の教育現場では、学びの主体としての学習者の在り方を回復することが求められているし、その回復は、新しい知を構成する場としての大学教育において切実な課題としてとらえられるのである。

4. 授業者の非言語的要素を遮断した授業実践と学習者の意識調査

4. 1. 授業の方法とねらい

ここまで述べてきたように、学習者としての大学生の実態は現在大きな課題を抱えており、大学の授業においては、大学生に学習観の転換と学習集団への参加を促すことが求められている。冒頭に述べた COVID-19 感染拡大及び、その影響を受けたオンライン授業はこのような大学生の学習実態の中で実施された。

オンラインでの学習集団の形成やグループ学習については、対面授業との違いからその困難性が報告され、その一つの要素である「身体性」をいかに補うか、代替するかが課題となった。アイズブレイクやアクティビティが工夫され、オンラインで他のメンバーといかに関わるか、いかに学生同士の、あるいは、授業者と学生との関係性を紡ぐか、多くの教員が試行錯誤したことだろう。しかし、大学の授業や学びについて考えたとき、重要なのは関係性の構築だけではなく、その集団が学習集団として成熟すること、認識の拡大と深化、集団の民主化の過程として授業が存在することではないだろうか。

このような問題意識から、筆者は自身の担当する複数の授業で、受講者が授業担当者の存在を認識しにくくする試み、具体的に言えば、オンライン授業において、授業者の言語行為や非言語行為、非言語要素を可能な限り少なくすることを試みた。COVID-19 感染拡大前の対面での授業においても受講者同士での議論を促すことが困難であったり、受講者が質問や意見を述べる際に、授業者の評価を気にして授業者の方を確認しながら意見を述べたり、質問を行ったりする姿が見られたこともその理由の一つである。

筆者は、2020 年度に行ったオンライン会議システム (Zoom) を利用した授業でのディスカッション及びグループワークの場面において、受講者が授業者の非言語情報を得ることができないように、授業者の側のカメラとマイクをオフにして、受講者にディスカッションやグループワーク、ひいては授業を主導していくように促した。授業者は講義や説明の場面においては、カメラとマイクをオンにした状態で授業を行うが、グループワークやディスカッションの場面では、カメラとマイクをオフにして授業を実施した³⁾。

それでは、以上のような方法で行ったオンライン授業について、受講者はどのようにとらえていたのか。以降、2020 年度中に実施したアンケート調査の概要と結果について示し、分析と考察を行う。

4. 2. 調査の概要

本調査は、オンライン会議システム (Zoom) を使った授業 (2020 年 4 月から実施) に対する感じ方や意識について把握・分析することを目的に行った。方法は、Google Form を活用した Web アンケートであり、2020 年 12 月 12 日 (金) から 12 月 18 日 (木) までの 7 日間で実施した。対象は、筆者の担当する授業の受講者、大学 2 年生から大学 4 年生 30 名である。倫理的配慮として、収集したデータは、個人が特定できないように処理され、本研究以外の目的で使用することはないこと、また、この調査に協力するかどうかについて自由意志で決定でき、協力しなかったことによる不利益がないことを説明した。そのうえで、研究の趣旨を理解し、調査に協力できる場合のみ質問に回答してもらうよう授業内で口頭にて説明し、Web アンケートフォームのトップ画面にも示した。

質問項目は以下の 4 項目である。

- (1) オンラインのコミュニケーションのとりやすさに関する意識（4件法）
- (2) 項目1のように感じる理由
- (3) 授業者がカメラ・マイクをオフにした状態でのグループワークについてのやりやすさに関する意識（4件法）
- (4) 項目3のように感じる理由

4. 3. 調査結果と分析

回答数は28件（93.3%）である。

項目1「オンライン会議システム（Zoom）を用いた授業におけるコミュニケーションのとりやすさ」について、対面時と比較して「とりやすい」「どちらかというとりやすい」「どちらかというとりにくい」「とりにくい」の4件法で尋ねたところ、「とりやすい」が3件（10.7%）、「どちらかというとりやすい」が5件（17.9%）、「とりにくい」「どちらかというとりにくい」がそれぞれ10件（35.7%）であり、71.4%の受講者がオンラインコミュニケーションに難しさを感じており、「とりやすい」「どちらかというとりやすい」と回答した受講者（28.6%）を上回った。

一方で、項目3「授業者がカメラ・マイクをオフにした場合のグループワークのやりやすさ」について、対面時と比較して「やりやすい」が8件（28.6%）、「どちらかというやりやすい」が11件（39.3%）、「どちらかというやりにくい」が6件（21.4%）、「やりにくい」が3件（10.7%）であり、67.9%の受講者が「やりやすさ」を感じており、項目1の結果と逆転する形となった（図1）。

つまり、受講者の多くがオンライン授業におけるコミュニケーションには難しさを感じる一方で、授業者がカメラとマイクをオフにした状態でのオンラインのグループワークには対面時と比べて「やりやすさ」を感じていることが明らかになった。

次に、項目2、項目4の結果について示す。オンライン会議システムを用いたコミュニケーションについて、肯定的にとらえる理由（全7件）について、それぞれの回答に共通する点は多くなかったが、「他の受講者や授業者からの認識のされやすさ」や「雰囲気」を挙げる回答が複数見られた。

【他の受講者や授業者からの認識のされやすさに関わる回答例】

- 先生が画面を見ているため、対面授業に比べて視点が移動せず気づいてもらえると考えから
- 対面だと声が小さいせいでみんなに認知してもらえないが、zoomならみんなに伝えやすいし、他人の発言も聞き取りやすい。

【雰囲気に関わる回答例】

- 対面だと緊張して話せなくなる時があるけれど非対面だと周りを気にせず自分のペースで話せる
- 対面とは違い、質問等や発言をするときに、他の学生がこちらに顔を向けて注目し[↑]いたり静かになったりということを体感的に感じにくい[↑]ため、躊躇することなく発言できるから。

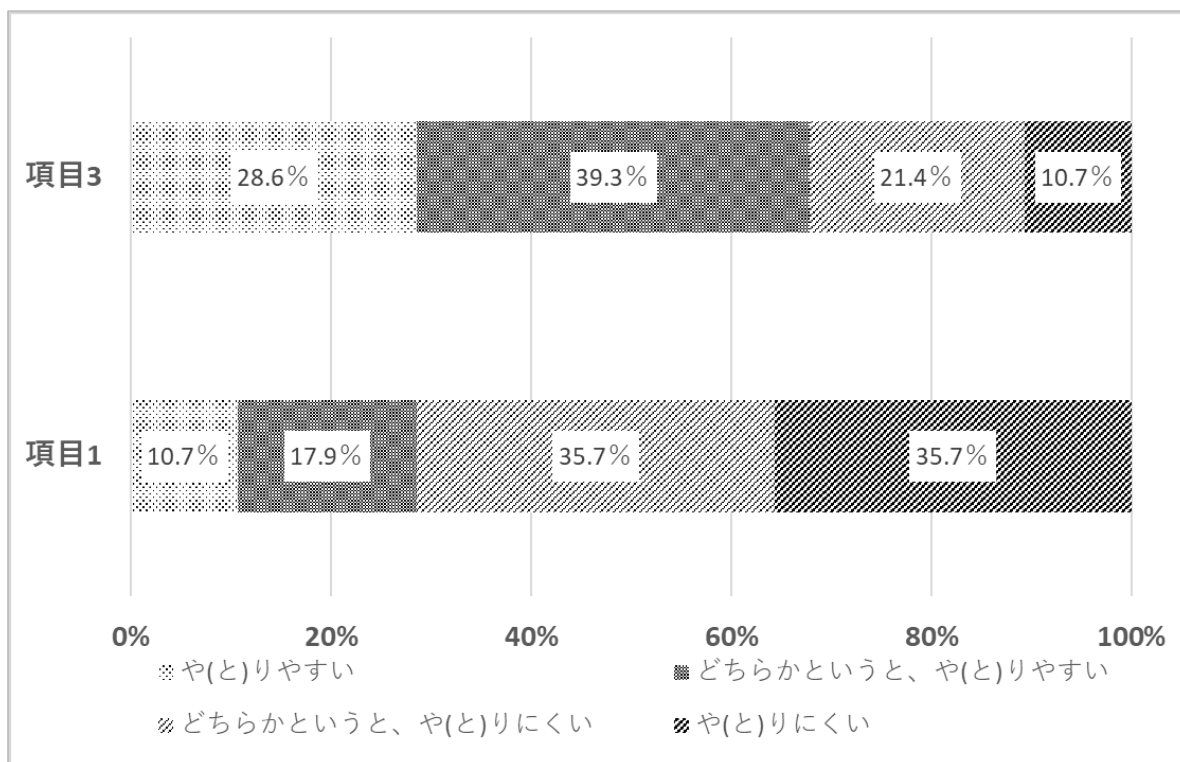


図1 項目1及び項目3の回答結果

一方で、オンライン会議システムを用いたコミュニケーションについて、否定的にとらえる理由（全21件）については、それぞれの回答に共通する点として非言語的要素についての記述が多く見られ、一番多く出現する語は「タイミング」であった（全13件）。このことから、受講者は、発言・発話のタイミングやターンの交替に難しさを感じていることが明らかになった。また、発言・発話のタイミングをはかったり、ターンを交替したりする際の手がかりとして、表情などの非言語情報を用いようとしていることを示す回答も見られた。

【発言・発話のタイミングに関わる回答例】

- 会話が重なったら聞こえにくく、待たないといけない。声を出しながら相づちを打ちにくい。
- 発言をするタイミングが被る、タイミングがとりにくい、授業によっては顔を出さずにグループワークをすることもあり表情が見えないときがあったから

また、「タイミング」と同数出現する語として「見え（る）」⁴⁾が挙げられるが、相手の表情が見えにくいことにより難しさを感じるという回答が見られる一方で、自身の表情、あるいは顔が見えること、あるいは、見られていることを認識してしまうこと、すなわち、見えることに対するネガティブな評価を示す回答が見られた。

【見えることへのネガティブ評価を示す回答例】

- 喋ると黄色くなる⁵⁾から。自分の顔も見えるから。
- 一人が注目しやすいため発言しにくい。

次に、グループワーク時に授業者がカメラとマイクをオフにした状態について、肯定的にとらえる理由について、「授業者の非言語や評価に関わる記述」「主体性・義務感に関わる記述」が共通して多く見られた。この授業方法について、肯定的にとらえた回答は全19件であるが、そのうち10件が、授業者の視線、表情が見えないため、評価を気にすることなく学習ができる点をその理由として挙げている。

【授業者の非言語や評価に関わる回答例】

- 対面の際でも、何かを考えているもしくは計算などをしている際、先生が近づいてきたりすると気になってしまいできない事があったため、活動中には見られていないという意識が働くカメラオフマイクオフの方が活動しやすいと感じる。
- 監視されているという印象がない。どの発言をするとどう反応するかといった表情が見えないので、顔をうかがうことなく発言ができる。

主体性・義務感に関わる記述については、3年次生、4年次生の卒業研究に関わる授業の受講者の回答において出現し、受講生自身が学習及び授業運営の主体であることを意識した回答の中に現れた。

【主体性・義務感に関わる回答例】

- 先生の顔が見えないので、発言を自由にでき、先生の発言に頼ることなく議論できる。
- 先生に頼る、見られているという意識がなくなり、学生間での話し合いがしやすいと感じたため。

一方、この授業方法について否定的にとらえる回答全9件のうち4件が、授業者の非言語情報が得られないことで逆に評価が気になる、不安になることをその理由として挙げた。

【授業者の非言語や評価に関わる回答例】

- 授業者がどのような表情をしているのかが視覚的にわからないため、逆に、こう思っているのではないかといろいろなことを考えてしまい不安になるから。
- 普段の会話で見られる、顔つき、表情や手の動き、体の動きによるリアクションが見えないので、間違った意見を出していないか不安になる

上に示す通り、今回用いた授業方法について、授業者の非言語情報が遮断されているため評価を気にしなくてよいと肯定的にとらえる受講者と、逆にそのことによって授業者（評価者）の存在をかえって意識してしまうとして否定的にとらえる受講者の存在が明らかになった。また、否定的にとらえる受講者（ネガティブ群）は、肯定的にとらえる受講者（ポジティブ群）に比べて、回答の中に非言語についての記述が多く見られた（図2）。

5. 教師・授業者の身体性と教育・授業の在り方

ここまで、オンライン会議システムを用いた授業について、授業者の非言語情報を遮断した授業方法を受講者がどのように感じていたかについての調査結果を分析的に示してきた。この結果から次のような点が指摘できる。

- ① オンライン会議システムを用いた授業において、学習者は対面時に比べて非言語について意識的であり、他者の非言語情報を得られる点ではポジティブにとらえるが、自分自身の非言語的側面に注目する/注目されることについてはネガティブにとらえる場合がある。
- ② 授業者は「評価者」として認識されており、授業者の評価を得る手がかりとして非言語情報が重視されているため、授業者の非言語情報を遮断するという授業方法は、「評価を気にしないでよい」という点ではポジティブに、「評価が気になるが得られない・確認できない」という点ではネガティブにとらえられている。

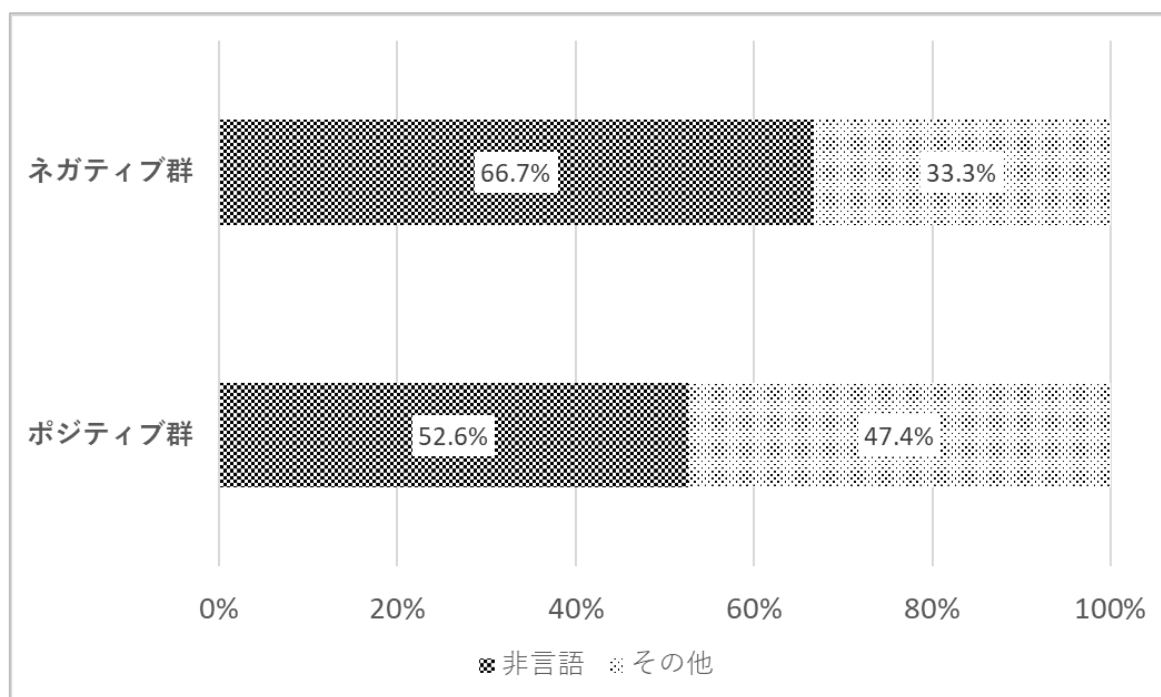


図2 授業方法に対する評価と非言語に関わる記述の割合

先行研究において、児童は教師(授業者)の視線配布を、評価を判断するリソースとして活用していることが指摘されていたが、大学生についても、学習者は授業者からの評価を求め、また、アイコンタクトが実現されないオンラインの状況でも、授業者の非言語情報からその判断を行おうとしていることが今回の調査から明らかになった。

今回分析・考察の対象にした実践では、受講者が授業者の評価を過剰に意識することなく、受講者同士の相互作用を通じて知識を構成する学びの実現を目的に、授業者の非言語情報を遮断するという方法で授業を実施した。これは、授業におけるコミュニケーションが授業者と発表者・発言者の一対一のやりとりになることを防ぎ、受講者同士の意見や発言が重ねられることを促す試みでもあった。例えば、授業者である筆者は、自分自身が発言したほうがよいかどうかを対面時より意識的に検討し、その必要があると判断した場合には、音声ではなく、チャット欄にコメントすることで示すようにした。その際、そのコメントは、気づいた受講者によって取り上げられ、議論の俎上に乗せられた。授業者の発した問いは、授業者に返されるものではなく、受講者間で考察され、新たに生成された知識として獲得されていった。また、議論のタイミングや軸によっては、授業者のチャットへのコメントはとりあげられない場合もあった。このようにオンライン会議システムの機能から生じる一部の非同期性や授業者の身体性を下げる特徴は、授業におけるグループワークやディスカッションの場面において、学習者が授業者を「正解」を伝達する存在、学習者を評価する存在として認識することを防ぎ、その存在性を相対的に下げるものであったことが調査結果からも明らかである。また、対面時に比べて低い授業者の存在性は、授業者が一学習者、共同探求者として存在することも可能にした。COVID-19 流行以降の状況下の「大学の「身体」」について述べた大橋 (2020) は、「教員の『身体』は、その存在ごと無力化されかねないリスクに直面する」(p.98) とする一方で、その可能性について次のように言及している。

それまで知識の唯一の発出元であり流れの上流とみなされていた教師という立場は、受講者

が様々な思想や知識、あるいは資料を持ち込み、各人の知を醸成させていく上で、そうした集団的な知の実践の流れを整理する地点として、あるいはその実践が必ず通過せねばならないポイントを指し示すナビ的存在としての役割変更を迫られるかもしれない。（中略—引用者）

大学授業のヴァーチャル化には、授業という場における知識や思考の伝達を、従来の教師と生徒のあいだの一方向的な関係から解放するものとして、肯定的に評価されるべき点もあるのではないか。大学の危機の一因と目された身体の阻害は、新たな知の流通形式を生み出す契機となる。（p.99）

本稿で考察した、オンライン会議システムを用いた授業において授業者のカメラとマイクをオフにするという試みは、積極的に「教員の『身体』を無力化」する試みであり、「新たな知の流通形式を生み出す」というよりも「大学における知の生成の在り方を回復する」試みであった。

しかし、その一方で、非言語情報の遮断によって「無力化」したはずの授業者の身体は、複数の受講者にとって、かえって不気味にとらえられ、不安をあおるものであったことも事実である。この事実は、授業者が学習者にとって、評価者（大学においては単位認定者）として権威的な存在であることから逃れることが容易ではないことを示している。またこれは、学習者のそれまでの学習経験を通じて「教える・教えられる」「評価する・評価される」関係としての教師と学習者の関係が、固定的に、そして強固に認識され、意識されているからであろう。また、その学習経験の中で教師が指導技術として活用する非言語行為は、学習者を励まし、学習の動機付けを行う行為としての「評価」から、やがて、正誤の判断を伝え、学習者をラベリングし、序列化するという「評価」に変換され、学習者に内面化されていると推察される。

2022年現在、対面授業が再開され、特に少人数の授業は対面で行われることが多くなった。授業の中に教師の身体が「復活」し、その存在性が「回復」されたと言えるだろう。しかし、オンライン授業を経て見いだされた知見をもとに、これまでの教育及び授業の在り方を見直す、捉えなおすことも必要であるし、「教師の身体」も必要不可欠なものとして自明視することなく、その必要性や在り方が検討されなければならない。

6. おわりに—研究の展望

本稿で分析、考察を行った実践は、研究を目的として行ったものではなく、エビデンスをもって指摘できることは限られているが、研究の視点や調査の方法について多くの示唆が得られた。例えば、今回分析と考察の対象とした授業には、筆者が授業担当者として非常勤で関わる本務校以外の大学での授業も含まれている。受講者との関係別で見たときに、非常勤で関わる授業については、グループワークやディスカッションの場面で授業者のカメラとマイクをオフにすることに対して、ネガティブにとらえる回答はなかった（回答者6人全員が肯定的にとらえていた）。裏を返せば、ここには大学生が専任で関わる教員（例えばゼミ担当教員）とは人間関係を形成、あるいは維持したいという関係志向をもっており、その評価を過剰に気にしている可能性が示唆されている。他にも、大学生の自己肯定感と授業者の評価を気にする（授業者の非言語情報が得られないことを否定的にとらえる）こととの関係や、大学生の身体イメージとオンラインコミュニケーション（「見られる」ことへの忌避、自分自身の顔がモニター上に映され視認されることへのネガティブ評価）との関係についても研究の意義があるだろう。あるいは、授業者がコメン

ト（同期的な「打ち言葉」）のみで関わることで、話し合いやディスカッションは、対面で、話し言葉で関わる場合とどのように異なるかについて、動画やコメント履歴などの記録とその分析を行うことで実態が可視化できるであろうし、それを基に、授業における教師の役割とその在り方（例えばファシリテーターとして）について考察、検討することも可能だろう。

先にも述べたように、今後非対面での授業は減少していくものと思われるが、凶らずも感染症の拡大がもたらした新しい授業コミュニケーションは、従前の、教室における対面でのコミュニケーションを捉えなおす、その自明性に気づくための視点を提供したと言えるだろう。

註

- 1) 日経 BP コンサルティングが 2021 年 8 月 5 日に発表した調査結果によれば、大学・短大・高専 320 校の内、2020 年度のオンライン授業実施率は 96.8% (310 校) である (<https://consult.nikkeibp.co.jp/info/news/2021/0805sub/>: 2022 年 8 月 30 日閲覧)。また、内閣府 (2020) 「新型コロナウイルス感染症の影響下における生活意識・行動の変化に関する調査」において、大学生・大学院生のオンライン授業の受講状況について、第 1 回調査 (2020 年 5 月) では 95.4%、第 2 回調査 (2020 年 12 月) で 87.7% の大学生・大学院生がオンライン授業を受講したと回答したことが報告されている (<https://www5.cao.go.jp/keizai2/wellbeing/covid/index.html> : 2022 年 8 月 30 日閲覧)。
- 2) 授業雰囲気と教師の非言語行動との関連について研究したものとして大久保ら (2013) や岸 (2015) などがある。
- 3) その他、授業者は、必要に応じてチャット機能を使って議論の中で発言したり、受講者へ個別のコメントを送って評価するなどした。またオンラインホワイトボードなどを用いて議論を整理しておき、グループワークやディスカッションの後でその過程や結果を可視化して示すなどした。
- 4) 自由記述の回答については、KH Coder を用いてテキスト分析を行っているため、他の活用形についてもコメントしている。
- 5) 授業で使用したオンライン会議システム (Zoom) では、発言者は黄色い枠で囲まれ、強調される。

引用文献

- 伊藤崇・関根和生 (2011) 「小学校の一斉授業における教師と児童の視線配布行動」『社会言語科学』 14 (1), 141-153.
- 岩垣攝 (1999) 「認識過程と集団過程」恒吉宏典・深澤広明『授業研究 重要用語 300 の基礎知識』明治図書、p.32
- 岩垣攝 (2003) 「授業づくりの新たな方向を探る」『千葉大学教育学部研究紀要』 51, 41-45.
- 大久保智生・岸俊行・澤邊潤・野嶋栄一郎 (2013) 「第三者による授業雰囲気の評定と教師の非言語行動との関連」『日本教育工学会論文誌』 37, 29-32.
- 大橋完太郎 (2020) 「大学の「身体」は変容する—COVID-19 流行以降の状況から」『現代思想』 48(14), 93-101.
- 菊池省三 (2022) 「レベル別全解説 教師のほめる技術 (第 13 回) 非言語の身体動作でほめる」『授業力&学級経営力』 (145), 96-99.
- 岸俊行 (2015) 「一斉授業における教師の教授行動の特徴とそれが授業の雰囲気に及ぼす影響の検討」『福井大学教育地域科学部紀要』 5, 197-211.
- 芝田進午 (1961) 『人間性と人格の理論』青木書店.